The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<図書紹介>濱野節朗,中野仁人編『アール・デコの鉄工芸』岩崎美術社1992,218P
Author(s)	竹内, 利夫
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53046
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

濱野節朗，中野仁人編
『アール・デコの鉄工芸』　岩崎美術社　1992，218P

アール・デコという呼び名が，1925年にパリで開催された万国博である「1925年パリ現代装飾工芸美術国際博覧会」の名称に含まれていた“Arts Décoratifs”という言辞に因んでいることはよく知られる通りである。装飾美術にテーマを限定したこの博覧会に向けて，同時代の全ての装飾家，そして装飾美術のあらゆる領域に関わる職人たちが総動員された。後々，リヴァイバルの日の目を見てアール・デコともてはやされるようになったその動向は，1925年のこの博覧会を重要な契機として勃興しまた退潮していったと言える。アール・デコの名が同博覧会の名称から抽出されたことは，ただの語呂合わせに加えて，この動向が1925年の博覧会と切り離して検討し得るものではないという理由によるのである。ご当地フランスのパリ装飾美術館学芸員イヴォンヌ・ブリュナメェルがその著書の中で「1925年様式」と呼びたがった所以である。

当時の状況を今に伝える様々な資料の中で，同時代の装飾家，職人，趣味人，そして産業家等を恐らくは対象にして出版された，美しい作品集の数々がある。染色文様だの家具だの，様々な分野にテーマを絞ったいわば業種別の作品集のことである。その多くがかわいらしいアール・デコ風の表紙デザインに飾られた厚紙表装に包まれ，ざっくりした紙に印刷されたコロタイプ印刷の白黒図版やステンシル印刷の素朴な色刷り図版を擁しているといった体のものである。

この画集は，当時すなわち1925年前後の，鉄工芸（＝Ferronnerie）と称される分野の装飾美術を集めたそのような作品集3冊を，1冊に再編集したものである。先ず，編者のまえがきに従って原本について少し紹介しておこう。原本は何れも『現代の鉄工芸（“La Ferronnerie Moderne”）』と題されたものである。出版年は不詳だが，掲載図版の内容及び解説文の内容から推察して，3冊のうち1冊目は1925年の博覧会と同時期か少し以前，2冊目は博覧会のすぐ後，そして3冊目は博覧会の2年後の1927年であるとされている。この内，2冊目と3冊目にはそれぞれ“1er Série”，“2e Série”との記載があり，この2冊に関してはシリーズものとして出版されたことがわかる。出版は何れもパリのシャルル・モロー社による。同社について筆者は詳しく知らないが，同社刊になる出版物に併載された販売記事を見ると，建築から室内意匠，家具，またガラスや金属，タピスリーといった各領域の工芸，さらに広告デザインなど幅広い分野の作品集を出版していたことがわかる。アール・デコの隆盛に主要な役割を果たした装飾家たちの集団「装飾芸術家協会（SAD）」の年次展図録も同社から出版されていた。編者も言うように，これらの分野について啓蒙の姿勢で精力的な出版活動を行っていたことは確かである。

さて，それら3冊に収められた図版が，ここでは品種ごとにまとめて編集されてい

る。(1)扉，(2)窓／格子，(3)ラジェーター・カバー／暖炉の衝立，(4)階段／手すり，(5)間仕切りの格子／室内扉／欄間，(6)シャンデリア／ブラケット／スタンド，(7)時計，(8)鏡，(9)コンソール，(10)その他，と10の分類を立てそれぞれの作品がまとめられている。318点の図版はいずれも白黒で，当時のコロタイプ印刷独特の柔らかく曖昧な明暗が再現されている。続いて2冊目と3冊目に掲載されていた編者アンリ・クルゾの解説文2編の翻訳が収録されている。さらに巻末には，編者による主だった装飾家についての略歴紹介が添えられており参考になる。

ところで，原本各3冊の編集にあたったのは，先の1冊についてはガブリエル・アンリオ，後の2冊はアンリ・クルゾなる人物である。当時の『現代装飾工芸美術年鑑』に目を通すと，両者とも「フランス芸術出版組合」の名簿に名を連ねている。クルゾについては手近のラルース社百科大事典に記載があり簡単に紹介しておくと，1865年フランス西部，ポワトゥー地方の町ニョールに生まれ，1941年パリで死んでいる。1920年から，当時パリの工芸に関する年次展の会場となっていたガリエラ美術館に籍を置いている。著書の多くは工芸の分野に属するもので，『フランスの絹工芸』(1914年)，『工芸』(1920)，『金属の手仕事』(1921) などがあげられる。「メチエ(＝Métier)」の問題に強い関心を持っていたらしい彼が，鉄工芸を熱心に追い掛けていったことは示唆的である。クルゾ自身が解説文の中で述べているように，様々な工芸分野の中で，同時代的な装飾美術を具現しようとする時，新しい製作技術と手仕事の間でこれほど大きく揺れ動いた分野はなかったのである。昔ながらのハンマーによる一品製作を信奉する勢力が片方にあり，ハンガリー生まれのアデルベルト・スザボがその代表格と目されていた。その一方で，各種の新しい溶接法やプレス機などを駆使し，かつての手仕事によっては決して実現し得なかったような形態の組み合わせを次々と可能にしていく作家たちがいて，そうした新潮流の頂点に立っていたのがエドガール・ブラントであったとされている。このような二つの局面のせめぎ合いとはまさにアール・デコの特質であり，鉄工芸はその問題をとりわけ素直に露呈していた。

画集の中には，スザボとブラントの扉や鉄柵を見開きで並べた頁がある。後者の作品は端正かつ華麗だがやや平板な趣をたたえ，それに比べて前者では多少鈍重でしかし独特の気品を漂わせているように思われた。1925年の博覧会場の様子を象徴する風景のひとつであった，会場北側の入り口を仕切るポルト・ドヌール門に施されたブラントの鉄扉も収録されている。1925年当時の鉄工芸が持っていた多岐多様な内容を，豊富な図版により十分に検討することができるような資料集となっている。

竹内利夫　徳島県立近代美術館